

第 35 回大分 NST 研究会 報告

当番世話人 大分県立病院 内分泌・代謝内科 田中克宏

令和 5 年 1 月 28 日ホルトホール大分において第 35 回大分 NST 研究会 ～QUALITY OF LIFE から考える栄養サポート～ を開催させていただきました。収束の見えない新型コロナウイルスの流行や直前の寒波・降雪もありましたが、予定通り集合形式での開催にこぎつけ多くの方々にお集まりいただくことができました。一般演題では 7 演題の発表があり、長期絶食患者の摂食再開に歯科衛生士介入が有効であった一例、心不全・緩和ケアチーム・NST の連携、訪問診療患者の栄養評価、外科手術と並行した胃瘻造設、新生児胃食道逆流症で母乳にとろみをつける工夫、胃瘻造設患者の背景解析、がん患者でのアナモレリンの使用状況調査など、それぞれの施設の特徴を背景とした取り組みを知ることができました。どの発表にも共通するのは NST を含むチーム医療の大切さだと感じました。

私から高齢者糖尿病の栄養管理などについての基調講演を行わせていただき、そして特別講演では藤田医科大学で経験を積まれ長崎原爆病院緩和ケア内科部長として活躍されている大原寛之先生に「緩和医療における栄養療法～なぜそのひと口が必要か～」というタイトルでお話いただきました。がん患者における代謝メカニズムの変化、低栄養（ともすると医原性）と悪液質の違い、とくに栄養補助食品・機能性食品・アナモレリンの有効性などについて解説をいただき、予後不良とされていても工夫した経口摂取が患者の活力を導いて存命期間の延長、QOL と QOD; Quality of Death の向上につながったケースを紹介していただきました。緩和ケアとなった患者さんにおいてもただ消極的に看取るのではなく、食べることをきっかけとした全人的な介入を行うことの意義を学びました。

栄養サポートにおいては患者さんの身体状況のみならず心情や価値観を理解すること、そして有効な選択肢を提案・実行できる知識とスキルを身につけること、さらに施設を超え地域一体で連携することが大切だと思います。これからも大分 NST 研究会がそれらの支えとなっていくことを期待します。

最後に今回の研究会の準備・運営に尽力してくださった世話人の皆さん、当院 NST メンバー、とくに山下 梓管理栄養士に感謝申し上げます。

